Ⅲ　高知女子大学衛生看護学科のふみ出す一歩

色々の問題を提案して来たが、どれをとっても困難はつきまとう。私は自分の提言が正しいなどとは思っていない。看護学の確立は看護するものにまかすのが本当であると考えているからである。ただよそで眺めてもこんなことが言えるのであるから、実際の看護にあたっている方々はもっと多くの問題をかかえておられるに違いない。高知女子大学は最も長い歴史をもつ看護の最高学府としてこのなやみを、看護の問題点を解決してゆく使命をもっている。それでは何から始めるべきなのか。私はあくまでも助け人として行動したいと考えこゝに１つ案を出してみたい。

先ず、看護学をどのようにして形づくってゆくかを考える必要があり、実践科学としての研究の場が必要である。しかし世の中はなかなか理想に対してはお金を出してくれないものである。自分達で考え、努力して造り上げるのが本物である。そこで、「高知女子大学付属病院を考えるの会」の設立を提案したい。この会はお金だけを集めるのが目的ではない。看護の現実を知ってもらい、国民の幸福のために我々の行動に賛意を表してもらうことが大切である。１口百円／月でよいではないか。賛意を表したくてもお金が出せないではこの会の趣旨にもとることになる。

何故病院というものをつくろうとしたのか、決して病院にこだわってはいない。看護の研究が出来ればよいのである。ただ、実践を通して研究し、しかも自分達でその経済をまかなってゆくためには病院がよいと考えたからである。勿論今ある病院ではない。看護を中心とした研究のための施設である。高知の病院の床数は日本一であるが、この病院はそれとは異なっている。病気の治療は今の病院が受けもてばよい。その後健康に向う者、慢性経過でしんぼう強く生きてゆかねばならない者、そのような患者を収容するのである。

このような施設が出来たならば、学生の実習は充実したものになるに違いない。すべては教育のためにつくられているのであるから、学生さんは今の実習病院で「それは間違っている。」と先輩に医師に言えるであろうか。かりものではだめであり、その発言が出来ないことには真の教育は成り立たないのである。こゝのすべての看護婦は教育者であり、研究者である。５０床から１００床のベットがあれば１０名以上の看護の教育者が出来る。これが現在の女子大の教員を助けるならば、今のように教育にだけ追いまわされることはなくなるに違いない。そこにきっとよい看護の学としてのあり方が見出されることが期待出来る。これが一番大切であり、この病院というものを目ざす目的なのである。

経営的な面から小さな手術しかない。慢性病のような患者ばかりでは成り立たないという考えもあろう。そこは協力で切りぬけねばならない。自分達の研究所として学生もそこでアルバイトをしてもらいたい。今でも１００名以上の学生がいる。その各々が出来ることを手伝ったならば、

そして経済のゆるす範囲の報酬でがまんしたならば、マンパワーによってなされる病院は、人件費で苦しいのであるから、きっと、もうけないまでも赤字を出さずにすむであろう。医師の心配をする人もいる。確かにこゝに来れば、はでな業績は残せなく、縁の下の力もちに終る可能性はある。でも私と考えを同じくする医師も世の中にはいるものである。私はそれを確保しますと自信をもって答えよう。常勤は3人いればよいのではないだろうか。

話は長くなるが、保健婦業務とのかゝわりあいもスムースに行くように思われる。なにしろ必要な人は送って、ひと先ず入院させればよい。それは自分達の病院なのだから。それから必要ならば本当の手術をするような病院が見つけられる。看護業務にゆきずまりを感じたら非常勤でこの病院に帰って来ればよい。卒業生の研究の場は大きな門が開かれるのだ。

よいことばかりならべたが、提案の時に考えたことを述べてみたまでである。だから病院をというのではない。そこで「考えるの会」としたわけがある。この会を進めながら、何が高知女子大にとって大切なのか、すこしでも実現に向かいながら考えればよいではないか。止っていては何も出来てゆかないなにしろ歩きましょう。高い理想に向って。そこでお前は馬鹿といわれるならば本望である。このやり方が間違っていてもよい。さあ一歩をふみ出しましょう。この言葉が私の高知女子大学衛生看護学科の学会に属する皆様方への最も言いたいことなのである。